

新しい時代、新たな生き方を考える

# これから

IV

まほろば顧問 宮下 洋子

## 前号のまとめ

1, 現代社会が、お金がなければ生きていかなない資本主義の構造原理の中に完全に組み込まれ、生存の自由さえ制限される世の中になって来ていること。

2, それは、**民主主義も、共産主義も、社会主義も、宗教も、科学も、国家も民族も超えた「現代世界全体の構造的原理」**であること。

3, 土族や部族を経済単位とした「**原始共産制社会**」では、食料の調達手段は、狩猟採集であり、共同の生産と平等の分配がこの共同体の基礎だったこと。それは、生産力が低く、生産手段（土地や生活資源）の共有と、協業と、相互扶助によって、はじめて生活が成り立つと言っ貧しさの中から、自然発生的、必然的に生まれた社会であったこと。

4, 食料の調達手段が狩猟採集から農耕・牧畜に移行すると、生産力が発展し、それと共に、私有財産が発生し、それがあらゆる不平等の起源であること。性差別も、起源を一にしていること。

## これから——2のまとめ

1, 私有財産の無い「原始共産制社会」での分業は、その役割に軽重はなく、助け合いの中で自然発生的に生まれた合理的な役割分担であったこと。

2, 私有財産が発生し、集団の規模が拡大すると、分業は、生産力を発展させるとともに、単なる役割分担ではなく、差別の発生源にもなったこと。

3, 私有財産は、必然的に相続と言う必要性を産み、家父長制社会を形成し、男女差別も生み出したこと。

4, 私有財産と分業は、階級社会や、奴隷社会も生み出したこと。

5, 最終的には、王と貴族によって統治された、強大で封建的な中央集権国家が、商人と結びついて、世界にも進出し、有色人種の国々を次々と侵略、植民地化し、奴隷化して搾取と隷属を強制し、強大な帝国主義国家を作りあげたこと。

6, 産業革命によって、さらなる効率化と、大規模化が図られ、急激に富の集積が進み、資本家と労働者と言われる階級が生まれたこと

7, 生産手段を持てる資本家と、持てない労働者階級、雇う人と雇われる人の間には、そこには善意や道徳、人間関

係を超えた、構造的に決定的な差異と利益相反が厳然としてあり、分配は不平等であること。

8, 雇用は労働力の商品化であり、生殺与奪の権は資本家階級が握っており、雇われるという事は、自由と平等をお金で売るということ。

9, 複雑なピラミッド型の階層構造の頂点に居るのは、国際金融資本家と呼ばれている人たちで、あまりにも階層構造が複雑で、てっぺんが見えなくなっているけれど(だから、ディープステートと呼ばれています)、この世界を支配している人たちである事。

10, 社会主義革命の立役者は、労働者階級ではなく、それらの人々を組織し、扇動し、リーダーシップを取ったのは、カール・マルクスの「史的唯物論」に影響を受けたインテリ階級であり、武器を供給し、経済的支援を行ったのは、ユダヤの財閥だったこと。

11, 社会主義革命によって、土地を国有化し、生産手段を独占し、権力を集中させたリーダーたちが、決して労働者階級の味方でなかったことは、歴史が証明していること。

12, 貧しい人たちは、ユートピアを夢見て、封建的な中央集権国家を打倒する

為に、財閥—今日の国際金融資本—に利用されただけだったこと。

### これから—3のまとめ

1, 交換価値として誕生したお金が、頭の良い人たちによって、金本位制が廃止され、実体経済以上にお金を増刷できるようになり、銀行や、証券会社、不動産業によって、お金がお金を生む仕組みが作りだされたこと。

2, 金融資本主義と言うのは、人も会社も、国も、信用と、契約と、投資と利子によって成り立った、バブルが生み出す不労所得で食べていける、上流階級と、格差社会を必然的に作り出したこと。

3, それは、「持てる者はますます富み、持たざる者はますます貧窮する」という仕組みであり、この、金融資本主義という構造的仕組みは、元をただせば、人が人を雇うという雇用と言う仕組みに発端点があること。



つまり、私たちは、金融資本主義という構造的仕組みの中で、身動きが取れなくなってしまう。

それでは、どのようにすれば、この社会を変え、自由と平等の平和な社会を作って行けるのでしょうか。競争原理の温床である私有財産を廃止し、共産制社会を構築すればいいのでしょうか。

しかしながら、それが成功しないことは、歴史が検証済みです。ロシアも中国も、停滞する経済を活性化するために、私有財産を容認し、資本主義の競争原理を導入してきました。人は、公共の為だけに一生懸命働かないという事が分かったからです。

また、私有財産を廃止し、土地や建物、機械類など、生産手段を国有化することが、平和な原始共産制社会に戻る事でもありません。現代社会で、国民の財産を国有化することとは、個々人の私有財産を集積し、国家の私有財産に



すると言う事でもあるのです。それは私有化の極致であり、国家権力の強大化であり、一党独裁の中共のような社会主義国家では、資本主義的要素を取り入れたとはいえず、個人の自由と民主主義は蹂躪され、命さえ保証できません。私有と自由競争が許されるのは、強大な国家権力に抵触しない範囲で、国家の生産力や技術、経済力の発展に寄与出来るところまでです。

また、原始共産制社会では、土地や生産手段が共有されていたと書きましたが、厳密に言うとうようには思いません。古代人の精神になって考えてみれば、土地は、神によって与えられた、天与の自

然であり、誰にもどこにも属さないもので、所有と言う概念さえなかったのではないのでしょうか。

ここを間違えると、社会主義革命による国有化、共有化が正当化され、共産主義ユートピア論に洗脳されてしまいます。

また、原始共産制社会の規模は小さく、何十人か単位のものだったようです。

寿命は、30才から50才くらいと言われ、食料を確保するために、全員が協力し合わなければ、生きて行かない貧しさの中がありました。

日本の縄文時代には、狩猟、採集ばかりでなく、粟や豆類など、ある程度の栽培が行われ、3万8千年年から1万6千年くらいまで（諸説あり）、水稲技術の伝来以前から、長期にわたり、定住生活をしていました。ある程度の分業と、統率者もいたようです。

規模が小さく、貧しく、生産力が低い社会では、種族の存続と繁栄が第一義であり、助け合って懸命に働くしか選択の余地はありません。



私有財産の発生は、水稲技術の伝来以後に起きました。私有財産の発生は、農耕や、牧畜などが始まり、さらなる分業によって、生産力が発展し、社会が豊かになってからでした。人口も急激に増えました。

このようにして集団の規模が増大すればするほど、全体が見えづらくなり、競争や争いも起きるようになり、人徳だけで、個人が統

率するのは難しくなってきました。ある程度の組織力と武力を持った、権力構造の誕生は必然でした。地方豪族の誕生です。さらにそれらを統一し、統率する国家も生まれることになりました。弱者や、女性に対する差別も生まれました。

別の角度から見ると、この段階で、生活の糧を生産する生産者と、消費しない消費者に分離が始まりました。

私有財産が発生することによって、分業による役割分担が、身分格差に発展し、さらには、土地から離れた消費するだけの階級も作り出していくことになりました。

本当に理想社会を築こうと思えば、こ



こらあたりの原点に立ち返って、深く考えてみる必要があるように思います

次回に続く